

段とリアルになり、ボールが壁にあたる音から「ドッテン野球」と呼ばれた。ドッテン野球とキャッチボールが遊びの主流だった。大勢で遊ぶ時も主役はやはりボールであった。ボールひとつで出来る遊び、サッカー、ドッジボール、バドミントン、キックベースボール、三角野球…とにかくボールを中心に走りまわった。正に発展途上国そのものだった。

▶ 卒業

小学校高学年、今なら進学を目指して勉強に追われる日々は結局何をしていたのかもわからないまま過ぎてしまった。はっきり覚えているのは運動会の棒倒し、騎馬戦、造形体操などで、勉強のことは全く思い出せない。修学旅行は無く、京都御所への遠足がその代わりだった。洲本の臨海にも結局行けなかった。卒業式は多分あったと思うが、全く記憶にない。卒業式のことを覚えていないというのはやはり異常である。疎開から帰って来た人達と卒業した人達とは随分違っていき、詳しい姓名、住所などは学校に記録がないのでまったくわからない。ただ卒業した時の一枚の写真があるだけだ。何人かの記憶をたよりに姓名だけは何とか分かったが、一部の人以外は住所や消息はわからず、今日まで名簿は作れないままである。

かくして私は昭和23年3月「追手門学院小学部」を卒業した(一年先輩の58期生は「大手前小学校」の卒業)いつの間にか卒業していたというのが実感である。実はその年は学院創立60周年であったが、当時そんなことを考えた人は誰もいなかっただろう。

出来たばかりの中学校

昭和22年、いわゆる633制の教育政策にそって追手門学院にも「中学部」が作られた。今の大手前中高の発足であり、これこそ大手前キャンパスのスタートでもあった。

私も、何となくこの出来立ての中学部へ入ってしまった。入学試験など何も無く、八東先生の口頭試問がすべてであった。

先生 今の日本で、石炭が無くなったらどうしますか？

私 結局は国が減びてしまいます。

先生 そんなにいつべんに言わずに少しずつ言いなさい。

私 …

一年先輩の一期生(小58期)は気の毒だった。彼等は「大手前小学校」を卒業して、しかも先輩のいない教室もない中学校に入ったのである。我々が入学した時もまだ校舎はなく、二学年が小学校のあちこちに間借りしていた。しかし、何と言っても一番のカルチャーショックは女子が入ってきて、しかも同席したことだった。子供の時から男子校の生徒にとって、中学になって突然女の子と一緒にいるのは遅きに失しており、言い換えれば刺激が強すぎた。この年齢の男の子はまだ子供だ。とまどい、恥じらい、照れくささの交錯する毎日だった。女の子とどう話したらいいかもわからない。何時からだったか女子だけのクラスができ、問題は一見解決したかに見えたが結局同じだった。一人ではしゃべることも出来ず、仕方なく集団で女子のクラスにストームをかけては撃退される日々であった。

しかし、この生まれたての追手門学院中学部ほどのびのびとした所はなかっただろう。戦中からのベテランの先生方もおられたが、まだ学生気分が抜けない、希望や野心に満ちた、何かやってみようといった若い先生方が数多く入って来られた。まるで「兄貴」といった方も沢山おられた。ベテランの先生との間に時々意見の相違が見られる事もあったが、我々はそんな事に頓着なく好き放題にわさばかりして先生方をいつも困らせていた。校長室の上の廊下にバケツの水をわざとひっくり返しても先生方は誰も我々を叱られなかった。上からの「お小言」はあっただろうが、それは皆先生方が受け止められていたのだと思う。ある意味でたいへんリベラルなよき時代であったのかも知れない。今の私の性格は、戦中のこわかった小学校時代よりも、この中学の3年間で形成されたと思っている。

昭和24年やっと校舎が出来た。木造二階建てだが、当時としてはお洒落な美しい建物で南を向いた壁には日時計があり、ローマ数字でMCMXLIX(1949)がデザインされていた。管理棟と教室棟の間には防火壁があり、ウダツがあった。

その頃既にラジオ少年だった私は、暇さえあれば日本橋をうろついてパーツなどを集め、学校では出口先生のおられた「理科準備室」に入り浸っていた。自治会の役員選挙の時、拡声器など作って感電して飛び上がったこともあった(私の応援した候補は落選した)。

▶ 軟式テニス

中学部に入ってすぐ軟式テニス部が出来、山田先生が指導しておられた。2年生になって入部した。体が弱かった頃は考えもしなかったことだった。新米はまず鏡の前に立ってフォームとスイングの練習、コートに出るとラインの外に立ってボール拾いである。コートは小学校の中庭にあり、殆どギリギリの大きさだった。小学校の校舎の床下には通気孔があり、鉄の蓋は供出してしまっていてそのままになっていた。そこへミスしたボールが飛び込むのを潜り込んで拾って来るのも又新米の仕事であった。中学生がやっと通れる位の穴でしかも低くて這って行くしかない。潜り込んだ方がいいが中は真暗、しかしその頃ボールは貴重だったから何と探して出さねばならない。猫やネズミに出会ったりしながら毎日真黒になり、いつしかボール拾いの名人になっていた。

疎開のおかげで足は丈夫になっていたの、そこそこのプレーが出来ようになり、3年生になって選手にもらった。当時我が追中には抜群に強いチームが3つあり、私は次の4番目のチームの前衛であった。府下の大会など5チーム編成で参加するのだが、いつも上の3チームが勝ってしまい私の出番はなかった。ただ一度だけ第3チームが敗れて出番が回って来てこれに勝ち、優勝したことがあった。軟式テニスとの出会いはこの時に始まり、大学院を卒業する昭和40年まで16年間続いた。足は更に丈夫になり、瘦せっぽちで真黒だったが、いつの間にか病気が無くなった。

▶ 校歌の誕生

現在の「追手門学院歌」は我々が中学部に入った時出来た。作詞は八東先生である。しかし当時ワルガキであった私共には、何か優しく校歌らしくないと思われた。キモも高く、声変わりした男子には歌い辛いところもあり、何かピンとこなかった覚えがある。しかし今読んで(歌って)みると、この歌詞には苦しい戦争が終わり平和な世の中になって本当によかったという八東先生の感慨が行間に切々と感じられる。高く聳える大阪城の姿や、濠水の静けさに平和の願いを託されたのだろうと思う。この校歌も、戦後の混乱の中から生まれた珠玉の一つであった。

昭和26年、ヤングパワーの先生方と、自由と、過保護と、よき追手門の伝統プラス民主主義にどっぷり浸かってすっかり人格を作り上げられた私は、こよなき思いを抱いて追手門学院をあとにした。一年前に始まった朝鮮戦争がますます激化し、一方ではサンフランシスコ講和条約がようやく締結されて日本は改めて独立国となり、泥沼から懸命に這い上がりつつあった日本経済が更に活性化しようとしていた時代であった。

おわりに

以上、大いに私情も交えて記録に残っていない我が校の戦中戦後を語ってきた。繰り返しになるが、太平洋戦争で小学校の建物が焼けずに奇跡的に残ったことと、何度も解散させられそうになった学校を、先生方や有志の方々あらゆる手段を用いて存続させられた事がその後の追手門の発展に繋がったのである。このような苦しい時代を見事に乗り越え、幼稚園から大学院までを擁する総合学園に発展した今日の追手門学院にとって、目指すべきは「オール追手門」に尽きると思う。下から上まで一本背骨の通った、一貫した学院作りである。他の私学と異なり、小学校から順次発展した我が校は、残念ながら次々誕生した各学校が独自のカラーを打ち出してしまい、一貫した教育理念に欠け、それぞれが自分を主張し、学院内の全ての学校が「中途半端」の状況である。この状況をたゆまぬ努力で着実に克服し、幼稚園から大学院までしっかりした教育理念の背骨を一本通すことが今後追手門学院の進むべき本道であると思う。そしてこれが学院を心から愛する一卒業生の願いでもある。



▲昭和22年運動会造形体操(大阪城は天守閣以外は何も残っていません)